



ロシア：「対極」の世界から (3) ～ 日常生活からロシアを垣間見る ～

ロシア連邦・サンクトペテルスブルグ国立大学留学中
服部 祐也

今回は、私がロシア人の日常生活を通して得た経験について、
健康診断とダーチャ（ロシアの別荘）を例にご紹介させていただきます。

企業の語学研修生として当地ロシア・サンクトペテルブルクに派遣されてから9カ月が経過しました。数十年ぶりの寒さ・130年ぶりの積雪量等、ロシア人をして「こんな寒い冬は今まで体験した事がない」と言わしめた極寒の季節が終わり、一転、木々が青々と茂る素晴らしい季節となりました。

私にとってこの語学研修の18ヶ月は、ロシアに於けるビジネスの開拓・発展に向けた準備期間です。ビジネスは人と人との関係が重要という事がよくいわれますが、その中でもロシアはそれが顕著だといわれています。その為、当地の研修に於いて私は単に語学の習得だけではなく、ロシア人のバックグラウンドを形成する要素の一つである日常生活を出来るだけ体験する事も心掛けています。

1、健康診断から見えるロシア

～設備の古さ、受け身の病院側～

私は現在サンクトペテルブルク市公認のロシア人野球チームに外国人選手として所属していますが、選手登録に健康診断が必要であった為、ロシア人チームメートと共に市内中心部にある医療機関で検査を受けました。その際、私は次の二つの事が特に印象に残りました。

まず、病院の設備の古さです。

受付は全く電子化されておらず、大学ノートほどある厚さの一人分のカルテが図書館の様に並ぶ光景からは、インターンシップ先の仕事で訪れたカメルーン郊外の街の政府機関が思い出されました。体重計は自分の手で目の前にある天秤を動かして測量する旧式のもので、使い方が分からない私にチームメートが呆れて手を貸す始末でした。尿検査では、恐らく昔ジャムが入っていたであろう、色々な大きさの瓶が整然と並べられている中から一つを取り、採尿に使います。

金融危機が発端となり経済が停滞はしたものの、近年の成長について何かともはやされたり脚光を浴びたりしているロシア。その第二の都市（“北のベネツィア”と呼ばれる美しい街）の中心部の医療機関でさえ、未だこの状況です（地方の医療設備は更に酷い状況の様です）。ともすれば未だソ連の様なイメージを抱く一方、金融危機前までの経済成長から、ともすれば実は先進国の様なインフラが整っているかの様なイメージを抱く国、ロシア。前回の記事（No.30）でソ連の面影と“西欧”との混在について書きましたが、この病院設備については未だソ連を彷彿とさせる状況でした。

次に、病院側と患者との関係です。こちらもソ連の名残を感じさせるもので、サービス供給者の病院側が受け身の姿勢なのです。

例えば、ロシアの病院における列の成し方は日本のそれとは少し違います。日本の場合は、病院側が患者を呼ぶ事が殆どの様に思われます。昨年当地で受診したアメリカ系のメディカルセンターでも同様でした。一方、ロシアの病院では病院側が受け身となります。患者は自分でカルテを持って、該当の医者の部屋の前へ行きます。待っている人が有る場合（殆どの場合そうですが）、「最後の人は誰ですか?」と、そこで待っている大衆に向かって聞きます。すると、該当者が答えます。順番を規定する列が存在せず、それぞれが思い思いの場所で待つ為、その最後の人を覚え、自分が部屋に入る順番を待たねばなりません。列が長い場合、最後の人が自分の前の人を確認した後ふらふらどこかに行ってしまう事もあり、そうすると、その後来た人達



ロシア人の日常、ダーチャでの食事。太陽が温かく降り注ぐこの限られた至福の数か月間、ロシア人は思い切りアウトドアを堪能する。